

条件付き連鎖主義の意義と課題

—ジェロルド・レヴィンソン『瞬間の中の音楽』の批判的検討

田邊健太郎 (立命館大学)

本発表では、ジェロルド・レヴィンソンが『瞬間の中の音楽 (Music in the Moment)』(1997) で定式化し、擁護した「条件付き連鎖主義 (qualified concatenationism)」を概観し、その独自性を明らかにするとともに、「基本的な音楽理解 (basic musical understanding)」に付与された重要性を議論する。

レヴィンソンは、19世紀イギリスの心理学者エドモンド・ガーニーの「連鎖主義 (concatenationism)」を修正・発展させて、条件付き連鎖主義を提示した。条件付き連鎖主義によれば、音楽の理解にとって、「音楽全体の構造の把握」や「遠くはなれた諸部分 (bit) 間の結びつきに関する知性的理解」よりも、「時間的に短い部分および部分から部分への直接的進行の聴覚的把握」、「現在に没入した注意深い聴取」を行うことが重要である。後者の種類の理解は「基本的な音楽理解」と呼ばれ、音楽理解において根本的かつ中心的な位置を占めている。加えて、大規模な構造を聴くためには、反復聴取によって楽曲の様式やジャンルなどの規範 (norm) を聴き手が内在化すること (技能知の所有) が要求されるものの、構造に関する命題知をもつことは要求されない。

条件付き連鎖主義は、「[ドナルド・フランシス・] トーヴィが言う「ナイーブな聴き手」の擁護」(Cook 1999) という動機をもち、音楽の構造を聴くことに価値を見出す20世紀において支配的だった「構造的聴取」と対立するものであったために、大きな反響を引き起こした。本発表の第一の目的は、ローズ・ローゼンガード・スボトニクの論考 (Subotnik 1988) 以降音楽学において議論されている「反構造的聴取」と、分析美学的アプローチをとる条件付き連鎖主義を比較することで、後者の独自性を明らかにすることである。

第二の目的は、基本的な音楽理解がなぜ／どの程度重要なのかという観点から、条件付き連鎖主義を検討することである。ニコラス・クックは条件付き連鎖主義に対して以下のような反論を行った。基本的な音楽理解のみでは、興味深く、意義ある音楽理解を得ることが不可能である。たとえば、ブラームスの《交響曲第4番》第4楽章を聴くとき、当該楽章から聴覚的に得られる効果と、当該楽章に基づくパッサカリア構造との間に緊張が生じている。この緊張は美的に重要なものであり、緊張に気づくためには、「現在に没入した集中的聴取」のみではなく構造に関する命題知が必要である。本発表では、クックの反論に対するレヴィンソンの応答を考えることによって、基本的な音楽理解に付与された重要性を検討したい。